ネパールにおける鍼灸ボランティア

熊木 亜夫（くまき つぐお）

はじめに

ティテパティよもぎの会（YOMOGI NO KAI）が主催するネパールにおける無料巡回治療（ヘルスキャンプ）が、今年も南部のチトワン（Chitwan）国立公園近くで行われた。

よもぎの会（YOMOGI NO KAI）は、畑美奈栄さんを代表とするNGOで、ヘルスキャンプは、1998年からネパールの無医村中心に巡回治療を続けており、一旦中断したものの2009年からネパール赤十字社の協力を得て、格段に施術場所、現地ボランティアスタッフなどの体制に恵まれ、患者数も大幅に増加した。

よもぎの会の活動のひとつであるこのヘルスキャンプは、東洋医学専門学校（OTTC）の設立、もぐさ工場・クリニックの建設と共に、大きなプロジェクトである。医療の整備が遅れているネパールにとって、よもぎの会の活動の期待は大きく、早くも来年のオファーが、ネパール赤十字社の支部よりあがっている。

このヘルスキャンプに、今回5回目の参加となったが、今までの活動を含め報告する。

写真1　よもぎの会畑代表

1．年々増えるヘルスキャンプ参加者とネパール人スタッフの協力

わたしが最初に参加したのは、2004年のカトマンズ(Kathmandu)郊外のダーディン(Durding)である。当時日本からの参加者は、わたしの他にわずか一人であったが、だんだんと数を増し今年は何と17人の大部隊となった。初参加の人も、2回目、3回目の人たちも仕事、勉強、費用をやりくりして熱心に参加を希望している。

この海外医療ボランティアは、参加の若者にとって、将来の自分の生き方に多いに役立つと確信するが、年齢は大体30代前後の人たちが中心である。まだ鍼灸学校に通っている人から、治療院を開業している人、他の医療系で仕事している人など様々である。特に目を引くのが、看護師、薬剤師、理学療法士など鍼灸以外の医療系の資格を持っている人たちの参加である。患者の疾患、健康を考える場合、各方面の専門的な知識が必要であると感じる人が、増えてきているのではないかと思われる。

このヘルスキャンプに欠かせない人たちは、畑代表の設立したネパールで初めての東洋医学専門学校を卒業した教え子であり、その後も協力者として畑代表を支えてきたよもぎの会のネパール人スタッフである。

特に東洋医学専門学校一期生であるイスワル(Mr. Ishwar Raj Balami)さんは、畑代表のよきパートナーで、何にでも精通するスーパー人間でもある。日本には何回も来日しているが、そのうち艾メーカで製造のノウハウを取得し、よもぎの会のプロジェクトのひとつである艾工場の建設とその後の製造に大きな役割を果たした。もちろんヘルスキャンプはいつも畑代表と同行し、治療はもとより、施術場所の準備、受け入れ体制など事務方の仕事にも万全を期している。

他にも畑代表の教え子を中心としたネパール人スタッフ4~5人が、いつも自分の仕事を休んで畑代表の元に参加する。今年は、たまたまJICAから2年間派遣された女性鍼灸師も加わった。

ヘルスキャンプに来る患者数は、ここ3年ネパール赤十字社の協力が得られてから、おおよそ1日平均500人、延べ3000人以上の患者を治療している。今年は特に多く、1日900人超えた日もあり、延べ3500人以上もの患者を治療した。圧倒的に女性患者が多いのも特徴である。

写真2　朝6時から治療の順番を待つ患者

2．ネパールにおける疾患、患者気質

患者とのコミュニケーション

治療にさいし日本でもこのネパールでも、当然問診が大事であるが、ここでは患者とのコミュニケーションをとるのに苦労する。患者の多くは自給自足さながらの貧困層の農民が多いが、我々の片言のネパール語で問診するのはなかなか難しい。

ネパールは第2国語が英語で、その教育が比較的行き届いているネパール人の多くは、学生ボランティアスタッフとの英語とのやりとりで、やっと疾患が判るのである。鍼灸を全く知らない患者は、鍼灸とは一体どんな治療だろう、廻りの様子から痛いのではないかと、緊張している様子がよく判る。しかしながらナマステ(Namaste)と手を合わせると、一瞬にその表情は和らぎ、ナマステと手を合わせて答える。ナマステとは気軽な挨拶ではなく、彼らにとって何か畏敬の念をこめた挨拶なのであろう。患者の表情は一気になごみ、明るくなる、尊敬の念を持つ、このときに疾患の幾らかは良くなっているはずである。

ネパール人気質　冷えと肥満

冷えが根底にある。雨季があるにもかかわらず、裸足で傘もささず、入浴の習慣が無いネパール人には、冷え、長雨による湿邪が根底にあり、それから派生する様々な疾患がある。

そのため、温熱中心の治療で、灸頭鍼や棒灸、知熱灸を多用する、ネパールにおけるヘルスキャンプ独特のやり方がある。また治療器具も鍼セット、灸、使用済み皿など一括してよく工夫されている。

写真3　治療器具セット

ネパール式棒灸は、このよもぎの会のプロジェクトのひとつであるもぐさ工場で製造している。一般の棒灸より、直径30mmと太く、灸を包む外側の紙も和紙状のもので、枇杷の葉灸のように直接的に温める。ネパール式棒灸は、患部におおったタオルなどの上から、棒灸を瞬間的にあて、手で熱と気を体内に閉じ込めるように指圧し、患部が温まるまで何度も繰り返す。患部にあたる棒灸の大きさと、灸と外側の和紙が一体となり燃焼するところが絶妙である。特に腰、肩、膝の疾患に適用されるが、坐骨神経痛で腰から足の先まで痛い患者には、腰を治療すると足の先まで熱が染み渡るとの声があるほど効果絶大である。

写真4　ネパール式棒灸治療

またネパール人の特徴として、特に 30 代後半以降の女性の肥満があげられる。栄養もいきわたらないと思うが、油を多く摂取するせいか、米など炭水化物を多く摂取するせいか、欧米人並みの肥満の人が多く、そのせいなのか、比較的胃炎、あるいは糖尿病などが多いことがあげられる。

ネパール人の疾患

疾患別の患者数は、やはり腰痛、坐骨神経痛が最も多く合せて 40%近くを占める。次いで膝関節を主とする関節痛であり、20%ほどおり、上下肢の痺れが 7%ほどでその他肩こりから頭痛、片麻痺、胃炎、婦人病などが次いでいる。糖尿病、パーキンソン、リウマチ、顔面神経痛、こころの病、目眩、不眠症、食欲不振、倦怠感などの日本でも数多く見られる疾患も多い。日本では自律神経失調症とか更年期障害などの病名が付けられるが、現代病が増加していると考えられる。最近のヘルスキャンプで感じる患者の傾向として、慢性的な内科系の疾患が増加しているのではないかと思われる。ポリオ、手術の不具合による後遺症、手足の感覚異常など、あまり日本での治療院に来ないような患者も散見されるが、わたしの治療院の疾患比率とあまり変わらなく、疾患の種類も多岐にわたってきている。ただ同じ腰痛にしても、督脈の陽関あたりを指す患者が多く、農作業の影響、座り方、姿勢などが関係して日本人とは異なる箇所の変形を示している。表1に疾患別内訳を示す。

疾患別内訳表

NO	疾患内訳	%	適用経絡、経穴その他
1	腰痛	20	膀胱経、胆経、督脈中心に痛む箇所。腎兪、大腸兪、腰眼、長強、委陽、委中、承筋、承山、崑崙
2	関節炎	18	主に膝関節痛。膝蓋骨の周囲の経穴。内膝眼、外膝眼、鶴頂、鶴頂の左右、犢尾
3	座骨神経痛	17	腰部、臀部、大腿後側の坐骨神経の走路。腎兪、大腸兪、殷門、胞肓、秩辺、委陽、委中、承筋、承山、崑崙
4	上下肢痛、痺れ	7	合谷、曲池、肩髃、太衝、行間、足三里、三陰交、陽陵泉
5	胃炎	7	胃経、脾経。不容、滑肉門、天枢、上脘、中脘、下脘、足三里、三陰交、膈兪、胆兪、肝兪、脾兪、胃兪。
6	偏頭痛	5	百会、上星、頭維、頷厭、懸顱、天柱、風池、完骨、肩井。肩こり治療（肩井、肩貞、天宗、秉風、肩中兪、肩外兪）も。
7	片麻痺	5	百会、肩髃、曲池、風市、絶骨、環跳、足三里
8	生理不順	5	脾経、肝経。中極、気海、天枢、水道。血海。三陰交、地機、陰陵泉、膀胱兪、小腸兪。
9	糖尿病	3	脾経、胃経。三陰交、地機、足三里。中脘、天枢、関元、気海。
10	その他	16	パーキンソン（肝経）、こころの病（肝経、胆経、厥陰心包経経、心経）、アトピー性皮膚炎（肺経、大腸経）、高血圧、小児疾患、副鼻腔炎など。
		103%	

日本での治療は、経絡治療を行っているが、繊細な日本人と農耕を主体とするネパール人の患者では、それなりに主証が異なるであろうとみていた。やはり基本証といわれる 4 つの分類に分けてみると、差が見られる。東京での治療院では、90%以上が肝虚の患者であるが、この国も 肝虚の患者がそれなりに多く、脾虚とともに 40%くらいを占め、残りは肺虚と腎虚それぞれ 10%くらいである。

全体的に、日本における治療より、初めて体験する鍼灸治療を受けるネパール人のほうが、効果は顕著に思える。治療は、患者との信頼関係に尽きると思うが、我々治療家をほんとうに信頼しきっている。“ また明日もお願いします ” という、ヘルスキャンプ 1 週間のうちに治そうとする患者自身の強い意志がある。

疾患例

例えば、坐骨神経痛（いわゆる臀部の膀胱経沿いに下腿の裏から足の崑崙付近までの痛み）は、なかなか日本の治療でも治り難い。今回の例では、39 歳の女性 (やや肥満) が、3 日間連続の患部への灸頭鍼による治療で、痛みがとれた。このような患者も数多くおり、また五十肩など腕が挙上できない疾患も、治り易いように思える。

もうひとつ症例、小学5年の 12 歳の男児の患者で、転倒によってと云っているが、生まれつ

写真5　坐骨神経痛灸頭鍼治療

きであろう。左右の上肢のバランスが悪く、左右の腕の筋肉や肩幅の違いが歴然であり、右上肢が発達していない。腕も上がらなく、指の力が入らない。そのため治療としてエクササイズから始まり、運動鍼、内関、外関への打ち貫き鍼や5指の先端（十宣）の灸、手全体の鍼などあらゆる治療を、畑代表が必死に試みる。治療後は、顔の表情も明るく変わる。

3 日間の治療で、指に力が入ってきた。挙上も出来るようになる。ただ筋肉がおちているため、家で、タイヤチューブを使用し、毎日家族と運動療法をすることを伝える。この少年は、畑代表の必死の治療に、涙を浮かべ痛みをこらえていた。

写真6　少年の鍼治療

写真7　右上肢挙上出来喜ぶ少年

この症例は、患者に対していかに安心感を与えるか、信頼されるかであり、施術者の人間性、こころの豊かさが満ちていると、患者は安心して委ねることが出来るのである、と強く感じる出来事であった。

3．本当の豊かさとは

今年３月の東日本大震災で電気、水などの不便をしいられたが、はからずも本当の豊かさとは何かを考えさせられた大きな出来事であった。この最貧国のひとつであるネパールという国の電気、水などのライフラインの脆弱さは想像を絶するほど、我々には考えられない。しかしこの国には、日本の忘れかけた何かがある。大家族制が残るこの国は、物質面でははるかに及ばないが、日本人よりずっと心の豊かさを持っている。この国の人は何かと話しかけてくる。日本では、何か目的を持って近づいてくるのだろうと、そこそこに対応するが、そうでもないらしい。彼らにとって暇つぶしなのか、親切心なのか、よく理解出来ないが、それで騙されたり、危険な目に遭った事はない。知り合うと、すぐに家に招きたがるが、元来、この国の人は、人懐こく、親切なのかもしれない。

今年で、5回目のはり灸ボランティアとなったが、ボランティアという意識には程遠く、わたしはいつも、ネパールの人たちから気を貰い学び、ネパールの大地からエネルギーを貰って、また日本での仕事の活力となり、また訪問したくなる。宗教が日常の生活に根付いている、彼らから学ぶ点は多い。

また今回のヘルスキャンプの場所の近くにB.P.Koirala Memorial Cancer Hospitalという故コイララ首相の建設した近代的な癌専門病院があり、見学の機会があった。ドクターは、48 人いて、中国医師が治療をしている鍼灸科もあり、デイケア、ホスピスも併設されている。ここの院長は東北大学で放射線科の博士号を受けた人物であるが、癌患者で多いのは、女性で子宮癌、男性で肺癌という。患者はインド、ブータンからも来ている。ネパールにも、このような近代的な病院があるとは思わなかったが、ネパール人の患者はおそらくごく限られた人間であろうと推測できる。

さいごに

十数年前に初めてこの国を訪れてから、今回の訪問までに庶民の暮らしはさほど変わっていないように感じられる。確かにカトマンズの街に洒落た店ができたり、スーパーマーケットが見受けられ、品数が豊富になってきたりしている。しかし資源、産業に期待できない国にとって、教育は重要で、教育制度、人材の育成が鍵を握るといえよう。

ネパールは 200 8年に王制が廃止され共和制国家となったが、いまだに政治的な混乱が収拾していない。帰国当日は憲法制定日の期限日であったが、それぞれ民族のストライキが頻繁に行われ、憲法を制定できる見通しが立たないでいる。貧しい国だからこそ、政治的に早く一致団結して、生活のこと、医療などやることはたくさんあると思うが、遅々として進まないのは残念である。

それにしても、20 年以上もこの地に在住し、活動を続けるよもぎの会の畑代表は、この国に Acupuncture という言葉が通じるようになり、鍼灸治療を根付かせ、この国の人達を助けたいという情熱が、この国の医療を変えつつある。畑代表の功績により、鍼灸が教育省からの国家試験となり、ネパールで開業している治療院の殆どは、畑代表の設立した東洋医学専門学校（OTTC = Oriental Treatment cum Training Center）の卒業生である。

今回のヘルスキャンプでは、「海外で活躍するジャパニーズウーマン」というドキュメンタリー番組を撮影するためテレビ朝日のスタッフが同行し、畑先生代表に密着してヘルスキャンプなどの撮影が行われたことを報告する。

熊木亜夫　（くまきつぐお）

1947 年札幌生まれ。

1971 年北海道大学工各部電気工学科卒。

2003 年（株）東芝退社。

2006 年東洋鍼灸専門学校　鍼灸あんま科卒。

2006 年東京都稲城市でクマケア治療院開業。現在に至る。